

NPO法人

第42号 夏

# 芦安ファンクラブ通信

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ

事務局 南アルプス市芦安芦倉1589-8 大滝要造

TEL 055-288-2531 FAX 055-288-2533

URL=http://catv.nus.ne.jp/~afc3193/

E-mail=afc3193@nus.ne.jp

## 南アルプス開山祭

本年度の登山者の安全を祈願する『二〇一一年南アルプス開山祭』が六月二五日(土) 広河原モニユメント広場前で実施されました。

開山関係者と山岳愛好者によるセレモニーや献花、山の歌の合唱などがあり、クライマックスではNPO法人『芦安ファンクラブ』のメンバーが山の案内人に扮し、大天狗にベテラン宮下重晴さん、小天狗に前回参加された依田正さん、今回初出場の小天狗の私が加わり三人で『蔓払い』の神事を行うことに。

会場の別室で、イギリス人の牧師で登山家、「日本アルプス・登山と探検」の著者で日本における近代登山の父といわれる。ウオルター・ウエストンが一九〇二(明治三十五年)年には北岳に初登頂した。道先案内人に扮した衣装着替えること(ワラジからさん、きやはん、背負子、みの)着なれない衣装に、保坂さん、宮下さんの指導を受けな



がらんとか  
を身に  
まとい  
こんな  
もなか  
な。映  
画『劔  
岳点  
の記』  
案内人  
(香川  
照之)

と同じ格好だ。

外の会場では、地元中学生生徒による『北岳の歌』の合唱、夜叉人太鼓の演奏、と続き献花の後クライマックスでいよいよ『蔓払い』の儀式に。大天狗が山々の神に開山の祈願を申し述べた後、束ねた蔓を斧で『エイ・エイ・ヤー』の掛け声で斧を振りおろし蔓を切り開いた蔓の門を参加者や登山者を案内し通り抜けて安全登山を願い開山祭りは無事終了いたしました。

祭の後は地元の方々による手打ちそばや同市特産の桃が振る舞われました。南アルプス北岳に咲くキタダケソウ観察会も実施され、NPO法人『芦安ファンクラブ』のメンバーが参加者を案内し御池小屋へ向かいました。

文 大久保 長仁



## キタダケソウ観察会

恒例の開山祭は、梅雨時でもあり天候が心配されたが雲間から時々陽の光が指すまあまあの天気になった。然し上部は厚い雲に覆われ北岳も山頂は姿を見せない。仰ぎ見る大樺沢の残雪も多く、雨に降られないことを祈るばかりだ。

開山式のあと、恒例の手打ちソバと桃を戴いてから広河原山荘に集合した。一般参加者は六人とこれまでになく少なく、梅雨空で天候が芳しくない事からか直前になって取消があり当初申し込みの半分以下になってしまった。芦安ファンクラブのスタッフが四人、オーブン参加七人、他に山日新聞のザ・やまなしの記者二人が同行し総勢十九人である。広河原山荘で若干の打ち合わせの後準備運動をして出発した。

\* 広河原〜白根御池小屋

爽やかな林の中の登山道を歩き大樺沢コースとの分岐で休憩。ここからの尾根道は急登であるが、セミや鳥の囀りを聞き、足元にはギンリョウソウ、イチヨウソウ等が観られた。途中第一ベンチ及び第二ベンチで呼吸を整えて、急登を頑張つて登りきり休憩。トラバース気味の登山道は植物観察しながら歩き白根御池小屋についた。見上げる北岳及び池山吊尾根の沢も雪が沢山付いている。早速生ビールを注文するメンバーもいた。

御池小屋

夕食までに、大部屋で輪になり自己紹介をして、持参した酒やつまみで宴会となった。小屋は今シーズンのオープン初日で未だ一般の客も少なかった。部屋は四室が与えられ余裕があり、キタダケソウに逢えることを楽しみに早々と眠りに着いた。



＊御池小屋  
二俣  
早朝目が覚めると皆天候が心配になり外に出してみると、相変わらずの梅雨空であるが、回復傾向にあるように感じる。

じられ予定通りの行動と決める。  
二俣までのトラバース道は、このころの雨で濡れ、足元の木の根などが滑りやすいので慎重に歩く。植物は雪解け直後のため、まだ芽吹きが始まったばかりだ。二俣で休憩を取る。大樺沢の雪渓はいつもより多く、二俣から下部二三百メートルほどまで繁がっている。北岳の山頂は濃い霧に覆われて見えない。八本歯のコル方面を見上げると雪渓が切れ間なく続いており、上部二俣付近の傾斜がきつく見える。その雪渓を横断しなければならぬのが少し心配だが、つい最近北岳山荘の関係者が

下ってルートに目印をつけたということなので何とかなるだろう。

＊二俣～八本歯のコル

右俣の雪渓を横切り、大樺沢左俣岸の夏道を登る。この辺りの雪渓には大きなクレパスが口を開けている。夏道の雪は融けているが、お花畑の花はまだ早く、グンナイフウコやキンポウグの花が僅か数株開花している程度だった。暫くすると運悪く雨粒が落ちてきたので雨具を着用した。雨具を付けると雨が止むと云われるとおり、雨は大降りにはならず少しして止んでしまった。

バットレスA下沢を横切る手前で休憩し、アイゼンを着けた。ここから八本歯尾根取付き点までは、雪渓歩きを余儀なくされる。左上気味に登るのでスリップに注意が必要だ。雪質は割合固く表面は凍っていた。雪渓歩きに慣れていた人もありバットレスを見上げたり、振り返ったりして鳳凰三山や広河原の展望を楽しんで登る。



八本歯尾根取付きでアイゼンを外して、岩場・梯子等の尾根を登った。梯子は随所で更新されていた。八本歯のコルに出ると、残念だが白い霧に覆われ周囲の展望は得られなかった。ハクサンイチゲ、キンポウゲ等が咲き始めていたが、クロユリは蕾で未だ一輪も開花していなかった。  
＊八本歯のコル  
キタダケソウ群生地

コルからトラバース道分岐までは梯子から岩場歩きとなる。ハイマツの周囲にキバナシヤクナゲが咲きイワカガミも若干見られた。分岐点に荷物を置いてキタダケソウ群生地に向かった。南側斜面の草付きで雨に濡れた清楚なキタダケソウが我々を迎えてくれた。今年例年より遅れておりまだ満開にはなっていないが、沢山花が見られ、参加者は盛んにカメラのシャッターを押した。他にはハクサンイチゲ、オヤマノエンドウ、ヤマオダマキ等が咲き始めていた。

＊下山

トラバース道分岐から八本歯のコルへの下山の時、ガスが切れて間ノ岳、農鳥岳、富士山等が姿を現した。一同感動の声を挙げカメラに収めた。

文 望月 泰孝  
画 清水 准一

「世界のなでしこ」と「南アルプスのなでしこ」

2011年、女子サッカーW杯「なでしこジャパン」優勝おめでとう！  
「なでしこジャパン」が女子サッカーワールドカップ（W杯）で世界の頂点を極めました。  
長身ぞろいの外国人選手を相手に驚異的な粘りによって手にした栄冠は、重く冷え切った日本人の心を温め、たくさんの勇氣と元氣をもたら

してくれました。特に、その「諦めない心」は被災地でつらい日々を過ごす人たちへ大きな励ましとなったに違いありません。今でも鮮明にあの興奮が走馬燈のように思い出されま

私は、「なでしこジャパン」のナデシコから、北岳で7月下旬～8月中旬に見られるタカネナデシコが思い浮かびます。花弁の先端が細く、しかも深く裂けて糸のようになって咲き、ピンクの鮮やかな色が印象的な反面、控え目ながら気がつけば強い視線を向けたくなるその清楚な風情に魅せられます。  
この花たちは、あるときは笑ったり、泣いたり、楚楚とした姿でいたり、誇らしげであったり、小さい体なのに、厳しい高山の環境の中でも懸命に生きている姿がたまらなく愛しいという反面、烈風にふかれてもへこたれない磐石の強さを備えている姿は、まさに自然と人間を相対するもので、なでしこジャパンの「大胆」かつ「勇敢」な闘いぶりや、小さくても美しい姿に共通点をみいだします。凛として清らかで美しく勇敢で決して諦めない「大和撫子」の魂。きっと日本人女性である私たち誰しもの心の中に眠っているのでしょうか。その魂のカケラなりとも探してみたいものです。

文 清水 秀美

## 百花繚乱 北岳山頂全開

百花繚乱登山教室はまさに、その名の通り連続したお花畑の中を登った。肩の小屋、そして北岳山頂も三六〇度全開、北岳の優しさを満喫した。いずれの場所からも去り難く、いつまで眺めても飽きない光景の連続であった。

七月十三日芦安山岳館にて受付。昨年、良い経験をし、烈風雨登山を楽しんだ？仲間の顔がある。微笑みがある。タクシーに分乗して広河原へ、「早く来いよ」と雄姿が呼ぶ。皆、気が逸るのか足取りが軽い。広河原山荘にて開校式、石川リーダーより行程及び思いやりのある歩き方についてのお話、続いて渡辺さん、塩沢さんの紹介。準備体操後、六時二五分登山開始。間もなく大権沢を左に見る。

昨年の仲間とは今日の山行に何を感じているのだろうか？昨年の状況を一言で表現すると「激」これを「だき」とも読んだそうで「滝」の語源とか（朝日より）昨年の大権沢はまさにこの「激」であった。今年は自然の、そして北岳の優しさを見せてくれたリーダーのゆったりとした歩調

に配慮を感じながら高度を稼ぐ。山腹は満面の笑みと優しさを持って迎えてくれている。



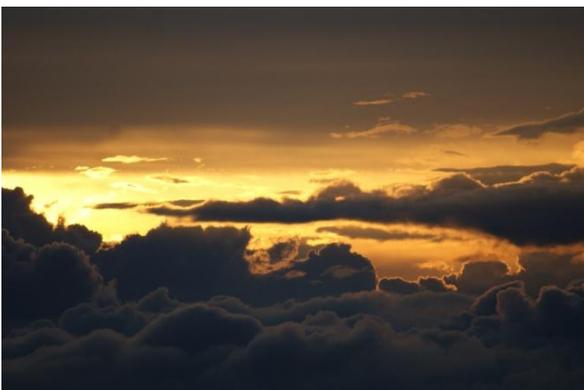
塩沢講師の「百花講義」は絶え間なく続いている。ご婦人方は次々と情報を記憶層に取込むが、当方はちっとも入力できない。そこで「酸素が薄いですよ」と投げかけると、誰かが「そんなことありませんよ」と一蹴。そうか酸素は関係なく、入力部に不具合があると納得してまた一步。「花を花で覚えようとする、これがダメ、葉・茎を含めて個を識別する」ことを今頃、悟る。可憐な花々はカンカン照り、

暴風雨雪と大きな振幅の中で、北岳の自然に寄り添って生きていく。彼らにとってはそれが当たり前前、何万年にわたり繰り返してきた。自然に寄り添えない者（自分もその一人である）はこの状況を「厳しい」等と表現する。本来、「この大きな振幅自然の優しさ」と考えるべきものだろう等、と勝手に思う。お花畑を見上げ、眼下に見て歩む。小太郎尾根が見えた。しんがり役の渡辺さんの「六根清浄 お山は晴天」を受けて皆、気合が入る。尾根に出て昼食、涼しい風に満足、肩の小屋まで残り僅か。予定通りガスが出てきた。

「そうかこんな景色だったのか」と妙に納得しながら、昨年の烈風雨の中を、漸く肩の小屋にずぶ濡れで辿り着き、ご好意の「感謝のホットココア」を思い出す。ガスの流れは速い、仙丈ヶ岳が目の前に浮かび、去る、遠くまでは見えない、今日は無理か？それでも粘る。オツと、渡辺講師による「古典に見るかいがね」の時間だ。「甲斐が嶺」が昔から、旅人・そしてその話を聞いた人々によって詩われ、慕われた情景が脈々として連なっていることを学ぶ。今日、こ

こに居る私達は何と恵まれていることか。夕ご飯まで少々時間がある。ガスは依然として濃く次々と湧き出て登ってくる。

日没前にはガスがなくなるそうだが、そのチャンスに期待して高安さんと待つ、少々寒い。霧が扉を開け始めた、仙丈ヶ岳、甲斐駒、鳳凰三山、富士山が次々と見えてきた。夕映えと茜雲の競演、山々のシルエット、富士山の上には月齢十三日のお月様、自然は優しい。万人と共有したい光景だ。既に七時半、就寝の時間迫る、まだ見ていたい。八時就寝。月の照らす山々は、シルエットの連弾を奏でているのだらうな。皆の心地良さそうなる寝息が聞こえる。



七月十四日、四時起床、朝食まで一時間ある、勇んで飛び出す、快晴・視界良好、日の出近し。北岳は既に朝映え、向の富士は赤紫色の屏風を背に雲を従えて日の出を待つ。光のドラマが始まり、歓声が上ががる。金色の空は炎のような激しさはなく静かだ。今日は安定した天気となるだろう。瞬く間に空は白み、シルエツト姿が起伏・凹凸のある山脈として現れる。「日の出はお日様を拝むのが常、お日様を背にした方向を見るのも趣があるのでは？」と天邪鬼が考える。三六〇度同時に見たいが無理な相談だ。

予定より一五分も早く出発、さすがに皆、山慣れている。頂上の景色を思い描き足取りも軽いイワヒバリが出迎えてくれる。「さくらんぼ収穫済んで北岳の峰 眼下に待つはブドウももも 梨」「甲斐が嶺」と甲州を取り巻く連山が醸し出す気候風土は、良質・豊富な特産品作りに欠かせない。それらも自然の恵みだ。そして、今日、待っている景色も。

近景、遠景共に筆舌に尽くし難い、遮る霧・雲がない、ぐるりと三六〇度全開だ！！ 頂上に

立つ。連山脈々として雲の袴を着け浮いている。石川リーダーを囲んで山々の位置取りを学ぶ。この感動と風光を表す言葉を持合せていない。「褒美だね」と家村さんが言う。そうだ、この場には感謝を込めたこの言葉がぴったりだ。ご褒美だ。ご褒美だ。槍・穂高・浅間・木曾駒・・・、近くは、仙丈ヶ岳、甲斐駒、鳳凰三山、間ノ岳・・・も夫々が凛と構え主張している。

去り難い眺望を後にして、優しい清楚な姿のキタダケソウに会いに行く。「元気にしていたかい？又、会えて嬉しいよ。今季は仲間（株数）も少しは増えたとか、ホッとしているよ。でも又、少々荒らしたね、ごめんよ」何万年も自然に寄り添って生きてきた力がこの可憐な花のどこにあるのだろうか？ 貴女はここで又、来季も開花シーズンのしんがりを務めてくれるのだね。石落注意・急斜面・ガレ場・丸十九折を皆、細心の注意で一步一步下る。さすがに皆、歩き方が上手い。途中、クロユリをカメラに収め、八本歯のユリに向かう。左手にバットレスを見ながら下るが、近すぎてその巨大さが読み取れない。昨年秋の登

山教室でボーコン沢ノ頭より見たバットレスの雄大な姿が蘇る。二股にかかる手前で雪渓を少し歩き、大樺沢に沿うコースをとる。

途中の水場で、肩の小屋のご主人に会う。「山の弱い生き物（雷鳥など）は登山者（人間）を利用して天敵から身を守っているケースも見受けられる」と貴重なお話、少し和らいだ気分になった。常々、「山に入る＝環境破壊」の図式もあり、後ろめたさのようなものを感じていたので、そして、人間も自然の中の一片であり、微妙なバランスの上にあることを改めて気づかせてくれた。もともと、人間が一番悪さ？をする生き物で、問題生物であるのだが。

自然に対する謙虚な姿を今回「寄り添う」の言葉を借りた。そんなことを考えながら、順調に広河原山荘に下山し、昼食を摂った。大きな仕事が無事に済んだような、満足感が仲間の顔に溢れていた。芦安山岳館に移動して閉校式になってもまだその余韻に酔っていた。

第二七回 南アルプス・芦安登山教室は北岳の優しさに触れる山行となった。百花繚乱のお花

畑と山頂の景観はたくさんの絵を描き残してくれた。「満月は富士に昇り、北岳に立つ、四面の連山、月光に澄み渡る」を想像しながら締めくくりとさせていただきます。（満月、上弦、三日月いずれでも、昼間の景観を月の光で見たいものです）

石川リーダー、渡辺様、塩沢様、そしてサポートしてくださった芦安ファンクラブの皆さんに、楽しい登山教室になりましたこと感謝申し上げます。ありがとうございました。





白根三山浪漫紀行

平成二十三年夏

はじめに

南アルプスの白根三山（北岳・間ノ岳・農鳥岳）に雪が来ると私の通勤は徒歩に変わる。その理由は、甲府市内から西に向かつて走るアルプス通り正面遠くの農鳥岳に気象条件が揃うと、時として白鳥（スワン）が出現するからです。

この白鳥は明治の終わりころから野尻抱影（のちの天文学者）が旧制甲府中学校に教師として赴任してきた際、積雪により出現し春から夏にかけて残雪と共に形を変えながら消えていく白鳥の雪形を日本山岳会に図示した説明文を添えて送り続けたことから農鳥岳の名称を確立不動のものとした経緯がある。私は徒歩通勤を利用して白鳥の雪形変化を眺め楽しみ、いつかは農鳥岳に登り雪形出現の地形をこの目で確かめたいものだとか常考えては計画してきたものの、天候や時間不足の日程などに阻まれ何回も途中で引き返しをやむなくされてきたところ、今回、なんと五度目の挑戦で白根三山を行って返す三泊四日の山行きが実現できたので感慨深いものがありました。

一日目（七月一五日快晴）

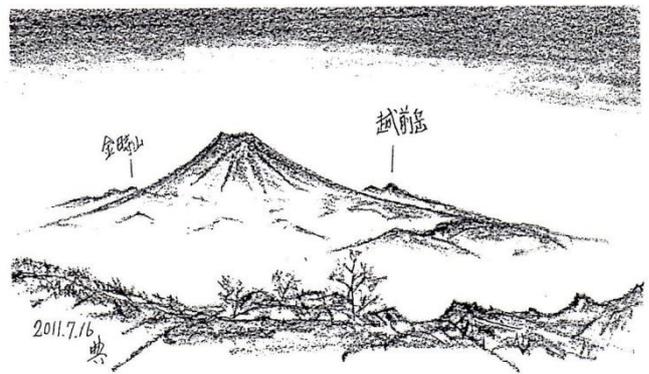
グループ名を「南ア遊歩人」と決めた四人パーティーは、登山計画書を所属する芦安FCと広河原登山口に提出し、三泊四日山小屋泊のザックを背負い出発（十一時四六分）。

今日白根御池小屋まで足馴しの三時間登ると、タカをくくって臨んだが急登での休憩時間が多く三十分遅れで小屋に着（一五時二十分）。早々に宿泊手続きと寝場所を確保して、あの急登では存分に地球の重力を体感させてくれた貴きワインをザックの中から取り出し冷たい沢水で冷やし、一日目の完歩に乾杯する。そこには澄み切った青空に聳え立つ北岳山頂と鳳凰三山があり、極楽極楽。

二日目（七月一六日快晴）

山小屋の朝は早い。朝食を済ませて（五時二七分）出発。今日はこれから八本歯を越え、北岳山荘、間ノ岳を通過して農鳥小屋まで三千メートルの稜線を登り下り約七キロの道のりを歩く長丁場、という行程に取り掛かる。見上げると北岳の急斜面に歯のようにギザギザ突き出している岩場なので「八本歯」と言い、この急登は二七個のハシゴを登り継ぎコルに辿り着く。

コルを越えると快晴の南の空には、長く裾を引く富士山の西側稜線五合目辺りに静岡県裾野市、富士市からなる愛宕山系主峰の越前岳と位牌岳が、それはクッキリと



現れ、その先の駿河の海と伊豆山系は残念ながら霞んでいました。八本歯に取りつく頃から、追いつ

越されつ、して登ってきた富士山から来たという女性老登山者二人組が話すには「私しやあ八十八（歳）になるが、あの愛宕山系の越前岳はホームグラウンドだ」や、「富士、二鷹、三茄子、は目出度さと初夢の決まり文句だが、それは、徳川家康が駿府に隠居し初茄子を所望すると、その値段が高いのに驚き、駿河の国で高いのは一番目が富士山、二番目が愛宕の山、三番目が初茄子、と言ったことが江戸城に伝わり大御所の発言が初夢や貴き事の代名詞となった」とか・・・

と聞き、いつの日かあの越前岳から私のホームグラウンドの白根三山を眺めてみたいものだと思つてみたりもした。きつと古の旅人が感嘆し、「甲斐の白根」「かひがね」と和歌に詠んだ情景が広がっていることだろう、と思いつつトラバース道を北岳山荘に向かう。

北岳山荘で昼食を済ませ、中白根を通過して間ノ岳山頂には予定時間より一時間遅れで着（一三時五五分）。ここでは五年前に我等芦安FCが国土地理院に協力して改埋設置した三角点標柱に手を触れて再会を喜ぶ。それから標高差約三百メートルを下り農鳥小屋に着いたのは、予定時間より遅れること一時間三十分（一五時三十分）、二日目の行程を終わる。

登山者から名物小屋番と噂されている農鳥小屋主人に、お逢いし話すことが出来たので、どんなところが名物なのか観察するに、年齢は六〇才前後、筋肉質でスリムという容姿、無精髭の口先から出る言葉が少し乱暴で登山者への各々注意事項としては有難いことですが、熱が入るとその範囲を超えてしまうことが多々見られた。又、腰に吊るしている大型の登山ナイフを見せてくれ、「このナイフで鹿と戦う。奴の頸動脈を一刀で仕留めないと負けてしまう、今年七頭も捕った。」とか武勇伝を披

露し、文献に伝わる明治の頃の登山案内人の姿が脳裏をよぎった。夕食を済ませたやま小屋からは甲府夜景が素晴らしく、空に文月の十六夜月が赤く浮かび上がると農鳥夜景は最高潮となっていました。

三日目（七月十七日快晴）

まだ夜が明けぬ三時五十分、ヘッドライトをたよりにM氏と二人空身で小屋を出発。コースタイムに少し遅れて西農鳥のピークに辿り着く（四時三十分）。ここには西農鳥岳を示す道標が見当たらず、M氏と二人、地形的・小屋からの時間的にもこのピークが西農鳥岳でしようとして、夜明けの山頂で記念撮影をする。時あたかも昨夜からの十六夜月が西の空に傾いていて風情ある山頂でした。

さてこれから往復一時間の東農鳥岳に向かおうとした時、突然M氏が「俺は行かない」と言いだし、私もどうしたものか迷った挙句、この山行きの第一の目的は東農鳥まで行かなければ達成できないので意を決し一人で出発しました。途中、岩を抱いて渡る難所を慎重に通過して目的の東農鳥岳に到着した（五時十分）。こちらには山梨百名山の標柱も三角点もありました。ここで白鳥が出現する東斜面を覗き込むと、既に雪は消えていました。山頂直下に現れる白鳥

の頭とくちばし部は茶褐色の岩が凹状となっている。首の部分は岩がずれて重なったような凹状となり、胴体は二つの沢の交わり部で大きく窪んでいた。なるほど、ここに最後まで残った雪が卵三個となり、その様子は白鳥が飛び去った後にチャボ（茶褐色の鶏）が卵を抱いている姿になるという、な

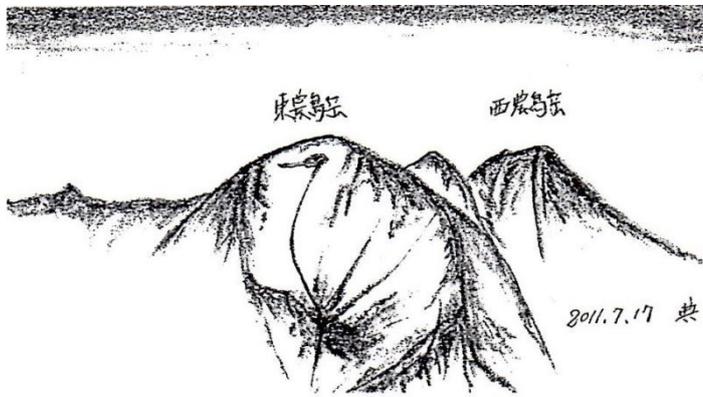
りゆきが岩や沢の形状から確認出来たので自分なりに納得し、念願の目的を達成しました。山頂の登山者の多くが大門沢に向かう中、私は農鳥小屋へ引き返し（六時二十分）、小屋に預けたザックを受け取る際に主人から「三人は三十分くらい前に出発した」と聞き、追いかけるかたちで今度は間ノ岳に向けて一人出発した。マイペースの一人旅で気ままに休

んでは登り、間ノ岳を通過（八時四十分）するとメンバーに追いつき、それからは再び気の合った仲間と談笑しながらの南ア遊歩となり、今日最後のピークでホームグランドとも言える北岳に向かう。日本で二番目の高峰なのにこの山は今日越えてきた農鳥、間ノ、中

白根と違って花が多く咲いているからなのか何となく楽に登れるような気がした。そうだ、これが懐の深い母なる山と言われている理由かもしれないと思っても見た。今夜泊まりの肩ノ小屋に着いたの

は予定時間より一時間遅れたが（一五時）、そこそは百花繚乱の山歩きを楽しんだからでしょう。四日目（七月十八日快晴）二日間の稜線歩きはさすがに疲れたのか、シツカリ休んでゆつくり目覚め、朝食を済ませ（七時二六分）小屋を後にした。途中二俣で休憩を取り一三時十五分に出発点の広河原山荘に無事下山しまし

とメンバーに恵まれ、農鳥出現の岩肌と沢の地形をこの目で確認し、チャボが卵を抱くという愛を表す山容を眺めると、南アルプスは母なる山だと言われている理由が判ったような気がした。そういえば、間ノ岳の長い稜線は両腕を広げ、手を差し伸べている母の愛だったかもしれない、これからは「愛ノ岳」と呼ぶことにしよう。八本歯登りで、八十才になると



おわりに  
五年がかりでやっと叶った白根三山を行って返す山旅では、天候

という老登山者二人が喘ぎながらも一歩一歩確実に登る姿を見て、まさに山は修験道だどつくづく感じ、あのようにいつまでも健康でありたいものだど敬服の限りでありました。又、昔風の面影を残す農鳥小屋では、名物主人の武骨さに懐かしささえ感じ、南アルプスの奥深さをこの一面からも体感でき収穫でした。気のあつた仲間同士で泊まりを重ね談笑する山行きは大きな幸せです。よき山、よき友、よき酒は楽しい山行きの三要素であるとしみじみ感じました。

「歳たけて  
また越ゆべしとおもいきや 百  
花繚乱甲斐が峰みね  
白根草幾千万年耐えて咲き継ぐ  
友に引かれて遊歩の旅路  
命なりけり  
その文月いざよいのころ」  
文 渡辺 典美